大江戸悪魔祭

高木彬光

大江戸悪魔祭

高木彬光

東京文藝社

大江戸悪魔祭

三九〇円

昭和三十七年六月二十五日印刷
昭和三十七年六月三十日発行

著作者　高木彬光
発行者　角谷奈良雄

発行所　株式会社東京文藝社
東京都新宿区牛込払方町一
振替口座・東京二一七五七

大江戸悪魔祭

目次

鬼面の美女　五
やせ浪人　一八
雪の常磐　三三
女難と剣難　四五
おふみ殺し　五六
老中の使者　七二
与力と医者　八四
悪魔屋敷　九七
南の奉行　一一〇
妖術師の残党　一二三
切支丹文書　一三六
影千代殺し　一四八
黒漆の秘密　一六〇
女の秘密　一七四
与力の仮面　一八六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

江戸っ子奉行　一九九
江戸の暗黒街　二二一
奇襲の決算　二三四
魔窟へ行く女　二三六
子を抱く女　二四九
ふたたび魔窟へ　二六二
銭うらない　二七四
お秋の遭難　二八六
くどき模様　二九九
美女変相図　三二一
物置の中の密語　三二四
金打の誓い　三三六
嘘でかためた真実　三四九
鯉つかみ　三六三
蔵の中　三七四
悪魔屋敷崩壊　三八八

装幀　山崎百々雄

鬼面の美女

一

青白い満月の光が、蓮の花の散ってしまった不忍池の水面を、鏡のように輝かせていた。暦の上では、とっくに秋が来ているのだが、まだ日中はやりきれないくらいの猛暑の連続だった。夜ともなると、さすがにかなり涼しくはなるが、それでも何となくむしむしする。例年にないいやな天候続きだったのである。

寛永寺の鐘が、ごーんと深夜を告げた。池のほとりの出会いの茶屋の燈も、しだいしだいに消えていった。閨の愛撫につかれた相思相愛の男女たちも、燈を消して、深い眠りに入って行ったのだろう。時々、池の中で、ぴしゃっと水音をたてて鯉のはねるほかには、物音も聞えない。

この時、広小路のほうから、足音をしのばせるようにして、池のほとりへ近づいて来た一人の女があった。

見たところ、町娘らしい着物だが、顔は紫の頭巾にかくされて、年も人相もわからない。こういう時刻に、つれもなく、こういう場所を歩いているとは、相当に大胆なまねだった。この女は、池にそって、中の島の弁天堂のほうへ近づいていった。

「今宵で満願……」

と、ひくくつぶやいて、その社前へぬかずくと、手をあわせて、なにか長い祈願を続けていた。
そして、まだこの女が立ち上りもしないうちに、反対側の七軒町の方角から、二人の男があらわれた。
どっちも人相はよくない。なりもやくざに崩れている。山下あたりの地まわりと思われるような風態なのだ。
「兄貴……」
「来ている……」
と、小声でささやきあうと、二人は肩をならべて、女のほうへ近づいて行った。
「あっ……」
その気配に気がついたのか、女はさっと立ち上って、こっちへふり返った。
だが、その顔は、いつの間にか、恐しい鬼女とかわっている。二本の角と、金泥色に光る眼と、耳までさけた唇が、月光の下では、何ともいえないぶきみな感じだった。
しかし、二人の男は動ずる色もなかった。
「やい、手前はいってえ何者だ」
「鬼の面をかぶって、人をおどかそうと思ったって、その手にはのらねえや」
女は何とも答えない。頭巾の上に、こうして面をつけていては、もちろん顔色の変化もわからない。
ただ、体もべつにこわばったような様子もなく、やわらかな長い指を、ぽきぽきならしているだけだった。
「毎夜、この弁天様に、あやしい女があらわれるてえんで、退治にやって来たんだ」

「さあ、おれたちといっしょに来い」
一人の男が、拳をかためて、女のそばへ近づいた。二間ほどはなれたところから、宙を蹴って女にとびかかったが、女はそのとき、三尺ばかり横に飛んで、この最初の攻撃をみごとにかわしていた。
「あま！　なめんな！」
十歩ほど泳いだ男が左から、満を持してかまえていた次の男が右から、今度は同時にとびかかった。
もう、この攻撃をのがれられるはずはないと思えるのに、女はまるで、兎のような俊敏さで、この二人の間をすりぬけた。
「畜生！」
みごとに正面衝突した二人は、いいかげん頭に来たのかも知れない。ここまで攻めつけられて、声ひとつたてない女が、小憎らしくなって来たのかも知れない。
よろめきながら、両方にはなれたとき、その手には青白く光る刃が握られていた。たいていの女なら、ここで叫びをあげたろう。しかし、この鬼面の女は、まだ唖のように沈黙したままだった。
「死ね！」
勢いこんで、つっかけて来た男の手から七首が宙に飛んだ。次の瞬間には、その体は一回転して、地上にはいつくばっていた。
「うぬ！　兄貴の仇！」
と叫んで飛びこんだもう一人も、おなじ運命をたどっていた。
「助けて……助けてくれ！」
後は、遂にこの女から短刀でも見まわれると思ったのか、地面にのたうちまわりながら二人はうめ

いた。

それでもまだ、女は声も立てなかった。そのまま、後もふり返らず、面もとらずに、境内を出ると、もと来た方角に姿を消そうとした。

二

「待て！」

しかし、女がまだ二十歩と行かないうちに鋭い声が闇をやぶった。

木立の中から歩み出て来たのは、年のころ二十二三と思われる白紋付の浪人だった。

背は高く、鶴のようにやせている。どこかに虚無の影をやどした、なかなかの美男子だが、その体には毛ほどの隙もない。進んで人を斬ろうとするような殺気は見えないが、自分をおそって来た敵は、かならず倒して見せるという受身の強さが見られるのだ。この女も初めて、身をふるわせて、立ちすくんだ。

「女だてらに、みごとな柔の腕を見せたな」

「……」

「その面をとれ。まずその顔が見ておきたい」

「……」

女はしばらく沈黙していたが、もう完全に気合負けを自認したらしく、静かに鬼の面をはずした。

もちろん、それでもまだ顔全体は見えないが、頭巾の間からもれている大きな両眼と、すーっと通った鼻すじは、相当の美女と思われる。その眼は、救いを求めるような淋しさと、何か大きな目的を妨げられたような怒りをやどしていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「何のため、このようなまねをする？」
ゆっくりと、この浪人はたずね出した。その声は、べつにおどしつける感じもなく、悪意もこもっていなかった。淡々としたこの言葉にさそわれるように、女の頭巾の下からはひくいかすかな声がもれた。
「心願の筋があるからでございます」
「その面は？　鬼面人をおどかすという言葉もあるが、何のため、そういう人さわがせなまねをするのだ？」
「人にさまたげられないためでございます。万一、邪魔者がやって来ても、これをつけておどかせば、逃げて行くだろうと思ったからでございます」
「いちおう、そういうねらいは分るが、女のあさはかさというか、少し藪蛇の感があったな」
この浪人は白い歯を見せて笑った。
まるで、子供のように邪心のない笑い方だった。女もさそいこまれたように、
「そういわれて見れば、そうかも知れません。ただ、本人は夢中で、他人にいわれるまで自分の愚かさには気がつかないのかも知れません」
と自嘲のようにつぶやいた。
「まあ、そのことは後にしよう。ところで、そなたの心願というのは何だ？」
「……」
「腕に自信のあることは認めるが、この深夜、女ひとりが、そのような異様な変装まであえてして、参詣に来るとはうなずけない。よほどの心願と思われるが」
女はふたたび、唖になったようにだまりこんだ。

「いわぬか。それをいわぬと申すなら……」
浪人が、いくらか凄みを見せていったとき、女はうたれたように顔をあげた。
「それでは、お斬りなさいませ」
「何と！」
今度は、この浪人のほうが、うたれたように身をふるわせた。
「今夜は満願でございます。本来ならば、家へ帰り着くまでは、誰とも口をきいてはいけないわけでございました……ただ、この場の成行きから、あなたさまの気魄におされ、ここまでお話はいたしましたが、何を望んで、こういう悲願をたてましたか、その秘密だけは、たとえ殺されても口外はできません」
「うむ……」
この浪人は腕を組んだ。
「それとも、町役人にでも話して、わたくしを捕えるようになさいますか？　それならどうぞ御自由に……難をさけるために、鬼の面をかぶっていたという以外、わたくしは何ひとつ、悪いことはいたしておりません」
「ははは、ははは、ははははは」
突然、この浪人は大声で笑い出した。
「なるほどな。そういわれて見ればたしかにもっともだ。拙者のほうは、べつに他意もなく、その悲願の内容が腑におちたら、場合によっては、力を貸してもいいと思っていただけだが」
「とおっしゃいますと？」
「たとえ、暴漢よけのおまもり、まじないにもせよ、女が鬼の面をつけ、深夜に参詣を続けるとは、

なみたいていのことではない。たとえば、復讐の志をいだき、この念願のかなうまで、わが心を鬼になしたまえと、神仏に祈るというのなら、それはよくうなずけることなのだが……」
この浪人は、見かけより、ずっと頭が切れるらしい。胸をえぐるような言葉を吐きながら、鋭い視線を女の顔にあびせかけた。
「復讐？　ほほほほほ、どうしてまた、そのようなことを思いつかれたのでございます？　弁天さまは芸道の仏、たとえば親の仇討などを思いたったなら、ほかにお参りするような神仏もございましょうに」
「それでは芸道精神のためか？」
「その願いは口外できませんと、ただいまも申しあげました」
この浪人は、いま一度、屈託のない笑いをもらした。
「それではこのまま行くがよい。この勝負、気合では拙者の勝ちと思うが、意地と張りではそっちの勝利だ」
「では、お見のがし下さいますか」
「八瀬新八郎、嘘はつかぬ。ただ、さしつかえがなかったら、其方の名前だけでも聞かせておいてくれないか。袖すりあうも他生の縁、またいつどこで再会せぬとも限らぬ」
「わたくしはお千代と申します……家がどこかは申しあげられません」
「よい、よい。往け。縁があったらまたあおうぞ」
お千代はかるく頭を下げ、小走りのような足どりでこの場を立ち去って行った。
「先生！」
「何だってあの阿魔をひっつかまえてやらなかったんで」

いま、投げとばされた二人のやくざが、新八郎の前に走りよって来て、いまいましそうにたずねるのに、
「鬼の目にも涙ということがあるではないか。なにしろ、むこうのせりふがあまりにも殊勝なので、つい見のがしてやる気にもなったのだ」
新八郎はまた豪放な声で笑った。

三

彼はそれから二人をつれて、池の端七軒町にある貸元、和尚の甚兵衛のところへひっかえして来た。このところ、半月ほど前から、この家へ用心棒として足をとめていたのである。
「先生、どうでござんした？　化物退治のほうの首尾は？」
甚兵衛が長火鉢のむこうから、心配そうにたずねるのに、
「斬れば斬れた。捕えれば捕えられた。だがその気にはなれませんでな」
まるで、禅問答のような言葉をのこして、新八郎は台所へ去った。きっと、冷酒を一杯用いているのだろう。
「わけのわからない先生だねえ」
甚兵衛の女房、おこまは剃跡も青々しい眉をひそめて、
「三次、助十、いったいどうしたというんだい」
朱塗りの煙管をあやつりながら、部屋の隅で小さくなっている二人に聞いた。
「へえ……女で、鬼の面をかぶっていやがるということは、ほんの一目で見ぬきやした」
「人さわがせなまねをしやがるあまだ。よし、ひっ捕えて番所へつき出してやろうと思ったんでござ

んすが」
「ところが、思ったよりずっと強いんで、柔術か何かで鍛えていると見えて、こっちはぜんぜん歯がたたねえんで」
「兄貴はみごとにふっとばされ、あっしもその二の舞いというわけでござんす」
「その後は、先生の出となったんで、ただ、こっちはいつ斬るか、いつ捕まえるかと思って、楽しみにしていたのに、話をしただけで放してやったというわけでさあ」
おこまは大きく溜息をついた。
「先生は、案外女には甘いんだねえ……うちの一家の名をあげるには、こんないい機会はなかったのに、ねえ、お前さん、そうだろう」
「まあ、物事はそうそうこっちの思惑通り、運びはしねえさ」
甚兵衛は苦笑いしていたが、おこまのほうは、まだ鬱憤がおさまらないらしく、
「お前さんはそういうけれど、いったい、あの先生は腕がたつんだろうか？」
と、嘲笑するようにいい出した。
「おれの目に狂いはねえと思うのだが」
「そりゃあね、どんなお侍さんでも、いちおう正式に剣法の修業をしていれば、やくざの薪割り剣法では、歯がたたないのもあたりまえだよ。ただ、あの先生は酒を飲むと、いま日の本では、自分の右に出る剣客は何人いるか——と大ぼらを吹き出すじゃないか。それならそれで、一度ぐらい、その腕前を見せてくれてもいいんじゃないかと思ってね。ほほほほ、男のことに、女が口を出しちゃいけないことはわかっているけど、つい悪口をいいたくなるのが人情でねえ」
「それでは、その腕をお見せしよう」

障子が開いて、新八郎が姿をあらわした。おこまはさっと顔色をかえたが、悪口をいわれた本人のほうは、べつに怒っている様子もない。
「やっ！」
突然、眼にもとまらぬ速さで、新八郎の脇差は宙に一閃した。
「何をする！」
「先生！」
人々は、思わずその場に立ち上ったが、そのときすでに、新八郎は白刃を懐紙でぬぐい鞘におさめていた。
「それ……」
新八郎が指さした畳の上を見つめて、人々は固唾をのんだ。
いつの間に迷いこんでいたのか、二寸ぐらいの蛾が一匹、見事に胴を両断され、黄色い鱗粉を散らして死んでいたのである。
「おみごと……おみごとなお腕前でござんすねえ」
甚兵衛も、腹の底から感心しきったように、
「どうだ。お前、むかしから能ある鷹は、爪をかくすというじゃねえか。これだけの腕をお持ちの先生なら、ちっとやそっとの御自慢はあたりめえのこった。それをかげ口などきいて……よく、おわびを申しあげろ」
「いや、その御念には及びませんな」
新八郎は、また例のどこか子供っぽい笑いをもらした。
「親分子分の仲ではないが、まあこうしてお世話になっているのは、いわば、叔父貴のところに居候

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.